坂小学校区　きずなづくりトークの意見概要と方向性　　10 月 11 日　坂公民館

地域	現況・課題	方向性・対応
市山新田	○通常の消火訓練、可搬ポンプの放水訓練、設備の点検に加え、危機管理課の職員に減災をテーマにお話をしてもらった。 ○防災訓練がマンネリ化している。 ○旧国道南側は地盤が悪く、大きい揺れがくれば心配である。	
玉沢（奥山）	○玉沢での訓練はまだ実施されていない。 ○中学生は通学している錦田中学校へ避難する事になっており、家族とは別の場所に避難する事で不都合が生じるかもしれないことが課題である。 ○台崎、玉沢は防災訓練を行わなかった。住民はどの程度防災意識を持っているのだろうか。（消防団）	○奥山地区の避難先を検討している。1km先の坂小学校だと近くて楽なので避難場所を確保していただいているが、玉沢の本来の避難先は錦田公園である。どう調整していくか話し合っていきたい。
山中	○消化器、消火栓、ポンプ、炊き出し訓練を行った。 ○毎月1回1組ずつ、男女ごとに分かれて消火訓練を行っている。女性は消火栓の訓練、男性は可搬ポンプの訓練を行う。年1回、全体の防災訓練を行っている。 ○実践的な訓練をしているので、住民の意識は高い。高齢の女性も参加している。全員に防災を意識してもらいたく、訓練を始めた。 ○全世帯の家族全員が公民館にそろう訓練はまだ実現していない。そのような訓練も行わなければ、本当の問題点は見つからないのではないか。 ○小学校自体の対策内容と自治防災は直結する。報道で震災後の生活は見たが、事細かな経緯は分からない。実際に困ったことを知りたい。	○山中は3．15の震災時にポンプが壊れた。水を備蓄しておくように留意してほしい。（市長） ○今後は消防署、危機管理課と話し、何をしたらいいのか勉強していきたい。 ○1次避難した後に、山中公民館に集まる訓練もしていかなければならない。 ○配布された自主防チェックリストは役員だけでなく住民全員が見るべき。こういうことが起こるから災害対策をしなければならない、と意識することが必要。 ○山中から坂小までが6kmと距離がある。途中の場所で休憩・避難できないか、行政に相談したい。
元山中	○消火訓練の際、消防からポンプを使って行うように言われたが、実際に災害があった時には使用するのは難しい。 ○食糧は備蓄があるので問題ないが、水と電気が問題である。 ○人数が多くないので、公民館で安否確認を行う。	○元山中は家畜が多いので、かなりの水が必要になると予測される。準備してほしい。（市長）
三ツ谷	○東海・東南海地震に備え、住民の方に真剣に訓練してもらった。 ○炊き出し、AED、消火器訓練を行った。 ○三ツ谷には消火栓が多いので、今年は消火栓訓練を行った。普段は月に1度、各組	

	で消火栓と可搬ポンプの訓練を行っている。 ○200名が参加した。 ○水の確保について考えなければならない。 ○三ツ谷で消防団からAEDの使い方を説明した。（消防団） ○今年、三ツ谷では消火栓の訓練を行った。可搬ポンプは普段から練習しないと使えないが、消火栓は簡単であり、また水圧も強いので十分消火できる。三ツ谷には消火栓が多いので、非常に有効な訓練である。（消防団）	
坂小学校	○今まで災害を予知できる前提で訓練していたが、東北の震災をふまえ、予知できない状況を想定することにした。 ○実際に震災が起これば、交通網の乱れなどが原因で、保護者への児童引渡しはスムーズにいかないだろう。	○学校で子どもを預かる状態も予想されるので、食料など3日間分の備蓄物資を用意していきたい。 ○各自治会長に集まってもらい、避難所としての運営会議を行っている。教員が学校にいる可能性は4分の1なので、会議進行はこれから地域の方の比重が大きくなっていくと思われる。 ○昭和5年に北伊豆地震が発生したとき、三ツ谷の断層がずれたことがあった。当時のことを覚えている方から、子供たちに体験談を語ってもらい、防災意識を高める方法もある。学校にも当時の記録が残っているかもしれない。（市長） ○実際にどの程度の備蓄が必要か調査している。学校独自としての対策をたてなくてはいけない。
坂幼稚園	○毎月1度、小学校と連携して避難訓練を行っている。 ○「保護者に引き渡すまでは園児たちを守る」という意識を高めるよう、職員に研修を行っている。 ○保護者の園児引き取り訓練で、車で迎えに来る人がいる。	○多くの方が避難する小学校での生活は、小さい子供を抱える方には厳しいものとなる。幼稚園も避難場所として検討してほしい。（市長） ○3．11の震災時には危機感を持ったが、防災意識が薄れがちな時期にきていると思う。意識を高めるためにも、車を利用しないなど実際の状況を想定した訓練を一度行ってみたい。
全体	周辺の状況、避難場所の確認	
	○第3次被害想定では、冬の朝の場合、三島市で270名が亡くなるとのデータが出た。	○山田町の火災は旧型の石油ストーブが原因である。災害を未然

	（市長） ○行政も、真剣に市内の災害対策に取り組んではいるだろうが、現実味が無い。（市山新田）	に防ぐよう、呼び掛けてもらいたい。（市長） ○阪神淡路大震災で亡くなった人の8割は、家屋の倒壊が原因。自宅の耐震補強を呼びかけてほしい。（危機管理課）
	各団体の組織の整備	
		○阪神淡路大震災で生き残った人の半数は、行政でも消防団でもなく、近所の住民に命を助けられている。地域の絆は必要。訓練への参加人数が少ないなら、このように集まって自主的に話し合うことも必要である。（環境市民部） ○一番の課題は近所に誰が住んでいるかを知らないことである。組単位のつながりがまず弱い。組を使って、地域の絆を作ってほしい。（環境市民部）
	訓練等の実施	
		○時間帯によっては消防団員が勤めに出ているため、震災時は消防団をあてにしないよう意識してほしい。自分たちで可搬、小型ポンプを扱えるように訓練をしてほしい。（消防団） ○山田町で津波から生き残った人は、普段防災訓練に出ている人ばかりだった。まず参加し、顔を合わせることが大切である。（市長） ○「自らの命は自らで守る」ことを意識し、自宅の耐震化を進めてほしい。また、救急車は4台しかないので「地域はみんなで守る」ことを意識してほしい。救助が必要な人がいれば、みんなで助け出す必要がある。訓練に取り入れてほしい。（市長） ○「生き残るために訓練を行う」ことを意識してほしい。（環境市民部）
	物資、資材の備蓄・点検	
	○うみゃあ水を2万本試作した。命のパスポートも活用してほしい。（市長）	
	連絡方法の確認	

	○震災時、連絡がとれなくなることが課題。（山中） ○自治会からの連絡はどうするか。（元山中） ○三島市には防災無線が入る場所が5箇所あるが、果たして使えるのか。（元山中） ○無線が入っても対応できる人がいないし、こちらからかけてもつながらないと聞く。連絡方法はどうするべきか。（元山中） **○公民館での人数確認作業が課題。（元山中）** ○電話を使えないので防災無線を使う事になるが、本当に機能するのか。市で対策を取ってほしい。（山中） ○市職員のアマチュア無線を利用するのはどうか。（山中）	○孤立地域では防災無線を利用する事になる。（危機管理課） ○電話回線が混みあう中で、無線はかなり有効であることが３．１１の震災時に分かった。（危機管理課） ○周波帯が1行政につき1つとなっており、各避難所でも同じものを利用する事になるため、行政の方から順番に連絡を取っていく形になる。無線の統制役が必要になる。（危機管理課）
	○消防団で無線の訓練を行っているので、行政無線のバックアップができるのではないかと思う。団員もアマチュア無線の資格を持っている。（消防団） ○ハンディタイプ無線も所持しているので、団員による避難誘導のときには、消防本部を介して市や避難場所へ連絡できる。（消防団） ○山中から市街地へ無線が飛ばないことも考えられるので、別地区を経由する訓練もしている。（消防団） ○各消防団から三島市内の本署への無線は届くことが確認されている。（消防団） ○防災無線よりも、アマチュア無線や消防無線の方が、市への連絡が取りやすいのではないかという意見が町内会で出た。（元山中）	